

公開対談シリーズ第6回

NINAGAWA 千の目

まもなく彩の国さいたま芸術劇場で上演される、蜷川幸雄演出による『コリオレイナス』で、主人公の運命を左右する強い母親役を演じる予定の女優、白石加代子さん。これまでも数々の蜷川作品に出演して来た白石さんは、蜷川にとって、最も信頼が置ける役者であると同時に、演劇が最も熱かった時代を生きて来た同志でもある。二人が繰り広げる話には、演劇の深さや面白さがたっぷり。味わい深い対談となった。

『コリオレイナス』の地に立ち、古代ローマに思いを馳せる

蜷川 (以降N) 『NINAGAWA 千の目』シリーズ、第6 回のゲストは白石加代子さんです。白石さんは1960 年代の後半に衝撃的な演劇をひっさげ、演技で世界中を魅了し、ヨーロッパでも名がとどろく優れた女優さんです。現在では『百物語』や朗読劇としての『源氏物語』などをお一人でされています。その白石さんからたくさんのお話を聞かせて頂きたいと思っています。白石さんどうぞ。(拍手)

白石さんは今度やる『コリオレイナス』のためだけではないと思いますが、イタリアにいらっしゃったのですね。演じるために役に立ちましたか。

白石 (以降S) スケールの大きさ、そして掘ればどこでも遺跡が出そうな雰囲気、その遺跡の下にはもっとその前の遺跡があるのだという話をうかがうと、とてつもない国だし、『コリオレイナス』は古代ローマのお話でしょう。だから雰囲気はちょっと分かりました。

N フォロローマノに行ったわけだ。

S 行きました。その気になっています。

N 主人公になった気分です歩いたわけだ。

S もちろんです。睥睨してきましたから。(笑い)

N ところが、『コリオレイナス』はただ古代ローマのセット、衣装でやるわけじゃなくて、少し日本風にするので京都の石段の方がよかったかもしれないですね。(笑い)

手の内を明かすと、古代ローマの芝居は、この間の『タイタス・アンドロニカス』で似たようなことをやってしまったので、いろいろな彫刻などを使いたくないのです。どうしようかと思って、少し変えようかと七転八倒して、どうい所でイタリア的なものを表せるのかと思った時に、「石の階段だ」と思いました。石段がずっとあるとローマの感じが出ると思ったのです。それを日本的な物の中に入れようかなというのが今度の演出プランなのです。



女優 白石加代子

早稲田小劇場(SCOT)を経て現在に至る。舞台を中心に映像でも活躍。主な舞台出演作品に、『劇的なものをめぐってⅡ』『トロイアの女』『東海道四谷怪談』『パッコスの信女』『クリテムネストラ』『悲劇』『桜の園』、現代能『應井』、『メアリー・スチュアート』『常陸坊海尊』『ミザリー』『8人で探すリア王』『おやすみ、母さん』『リア王－影法師－』など。蜷川演出作品に『夏の夜の夢』『身毒丸』『ペリクリーズ』『グリークス』『天保十二年のシェイクスピア』がある。又、連続企画『百物語』『源氏物語』を行っている。『百物語』は海外でも評価が高い。観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞、第1回・第3回読売演劇大賞優秀女優賞、スゴニチ文化芸術大賞優秀賞、芸術選奨文部科学大臣賞など数々の賞を受賞。2005年紫綬褒章受章。07年彩の国シェイクスピア・シリーズ第16弾『コリオレイナス』への出演が決定。

子供の頃から劇団に入るものと決めていた

N 白石さんは俳優になろうと思ったのはどういう事がきっかけですか。

S 蜷川さんの前でこんなことを話すのははずかしいけど、これはずっと後になって導き出した答えですけど、生まれつき血が騒ぐような子で、今でもテレビにつられて踊り出す子供がいるでしょ。ああいう資質ではないかと思います。その当時は車もあまり走っていなかったで、道路で踊っちゃうのです。そうすると母が心配して、あまり落ち着きがないから日本舞踊を習わせたりしたのです。しかし貧乏でしたので短期間習っただけです。その時のが身体にぴたっと張り付いているみたい。それと自己顕示欲が強く、父親が生きていた時にちやほやされていて、急にいなくなって、どん底になったら誰も自分に注目しないというような時代が来た時に、そこから何かはね除けて、何とか自分に目を向けて欲しいという意識があったような感じがします。そういうことが前提にあって、小学校の講堂で、巡回劇団の芝居を観て虜になり、小さな我が家に近所の子を集めてお芝居ごっこをしたのが最初だと思います。だから芝居は身体を動かして何か楽しいことをするのだと考え、いつか劇団に入るのだとずっと思っていました。でも私の家は母子家庭だったので、弟が高校を卒業した時に、「これで私は自由かな」と思って始めたのが早稲田小劇場です。

N 早稲田小劇場という劇場があって、60年代の終わりの方では衝撃的な演劇を立て続けにやっていました。早稲田の小さな喫茶店の二階ですよ。あの小屋ではお客さんは何人くらい入りますか。

S 無理に詰めても120人くらいですね。私が演じているところにお客さんの顔があるという詰め方です。

N いま演じてと言いながら、体や手をねじっていましたよね。すくくと立たないよね。

S 最初は、ご存知の通り“狂気女優”とか“情念の女優”とか言われていて、わりあい日本の物をやっていました。台本はきちっとあるのですが、狂気の女がこの台本を演じるという二重構造になっていて、すごくすてきな鏡花のセリフを言うのですが、身体は狂っているので変なことをするわけですから、ついねじってしまいました。

それはどういうことかという、狂気の女が座敷牢につながれていて、自分の幻想の中に時々入ってってしまうという設定です。幻想の中に入った時は泉鏡花の女系図のセリフなどを言うのです。一番覚えている所は、畳半畳の上に鎖につながれている。そうすると子どもが私に食べ物運んでくるシーンがあるのですが、突然、私がおもらしをして下の世話をさせるんですね。はいつくばって着物の裾をびゃっとめくってネ。ふと見ると20cm 位先のところにお客さんの顔があるんですよ。そういう身体をしながら、「わたし、山百合を買ってきて早く咲くようにつぼみに水を吹いて膨らませておいたのですよ」というセリフを言うのです。だから身体が一番はずかしい格好をしながら、美しいセリフを澄んだ声でうたい上げますから、身体と意識が引き裂かれた感じです。

N こういのは実演ですよ。演劇の魅力の基本的なことでは



次にやる時には、新しい白石さん、新しい蜷川幸雄像で行こう



ね。これは映像で観てもちっとも面白くないと思いますが、この空気を共有するとすごく人間に対する信頼関係というか、直接性がいいなと、僕などは思って演劇から逃れられないのですが、芝居ってそういう所がありますよね。

S そうですね。

N 白石さんとはお友達で、デビューが同時代にそれぞれの劇団で出てきたんですね。だからある種同窓生のような気分の所があるのです。それが僕らにある所では親密にしたり、自由にさせてもらえるのです。だから白石さん今みたいな役ばかりではなくて、「いい女をやろう。いい女をやろう」といつも言ってるよね。

S ウソばかり。汚い役ばかりやらせて。(笑い) 最初に蜷川さんに他の自分がやりたい作品を持ってお尋ねしたら、目の前で断ったじゃないですか。「俺、イヤだよ」と、すごいですよね。そういう方にお会いしたのは初めてでした。でも、少ししたら、その気持ちをケアしてくれるようにお願いがありました。その時の最初にきたお話は、シェイクスピアの『夏の夜の夢』というお芝居でした。当事の私はストイックな女優でしたから、ああいう祝祭劇は私には合わないと思っていたので、お断りしようと思っていたのですが、今度の翻訳家の松岡(和子)さんという人が電話で怒鳴り込んできました。「蜷川さんとの大切なこういう機会をもし逃がすとしたら、本当にあなたは愚かだ」と言うのですよ。「そうかな」と思って怖々出させて頂きました。

N 一番初めに頂いたお話の役が、どうもそれまでの白石さんを打ち壊すような力があるように思えないと思ったので、それだったら無理と思ったのです。

でも『夏の夜の夢』はとても面白かったね。お金がないからカツラ

を作れなかったのです。それで金網でカツラのベースを作り、黒いゴミ袋を買って、はさみで切ってわかめみたいに結わえていました。その上に造花を付けていました。その造花も有名なアートフラワー作家の飯田深雪さんのお宅にいて、「いらなくなった造花を下さい」と言って自分たちで頭に付けて作りました。

S 私は妖精の女王だったのですが、私の花冠は蜷川さんが作ってくださったの。それはもう、すばらしく美しかったのですよ。

N 白石さんの演技が驚くべき柔軟さで、まず軟体動物みたいに、身体がグニャグニャになっていき、声も何通りの声が出て、地をはうような、低い声から、ヨーロッパ的な朗誦も白石さんはできるから、地べたから天空までがあるのです。「いい女優さんだなあ。ここを鈴木(忠志。注:当時、白石さんが所属していた劇団SCOTの主宰者)に独占させておくのはおしいなあ。取っちゃえ」という感じでした。あれは楽しかったですね。ロンドンも行ったのですが、ロンドンでも受けたよね。

S ロンドンでは『夏の夜の夢』は学芸会で誰もが一度はやるみたいです。だからお客様全員がセリフを知っているのです。日本語でやっているのにすごい受け方で、日本語が分かるのではないかとというぐらいでした。

お母さんと妖怪。 両方をできる女優は稀有

N 白石さんと一緒にやった『身毒丸』のシーンをお観せしましょう。(ビデオ放映)

これは、お母さんが死んでしまったから新しい母を買いに来よう。

自堕落な身体で綺麗な声を出すような、分離したようなことが好き



お母さんは取り替えがきく、買えるものだ、と思ってお母さんを買いに来るのです。観てほしいのは、白石さんが演じているのですが、買われてきた、娼婦のように売られていた女が、町の女から主婦になる瞬間です。まず髪型を白石さんが変えます。座って、髪型を確認して、着物を合わせたりしています。お手伝いさんが何かを手伝っています。おっと主婦になりました。母になったのです。

これは台本ではたいして書いていないのですが、どうやってつないでいくか、引き抜きとか、歌舞伎の伝統を入れたりしながら一瞬で変わっていくということで見せたわけで、それが我々のやった共同作業だったのです。

あと終盤では、子どもを失ったお母さんが地獄で子どもを捜している、地獄というよりも死の世界で、妖怪よりの白石さんもお見せしましょう。(ほら、妖怪が出た。(笑い)(ビデオ終了)

お母さんになっていく白石さんと、変化した白石さんと二つのパターンを観て頂きましたが、ここにいる白石さんもあるので三つのパターンを見て頂きましたが、やはり過去のいろいろな演劇をやってきたことがこういうところでは自在に白石さんは操っているということはあるですか。近代的な演技の体系でいうと、前者はできても後者はできにくいのです。ですから両方を一人の女優さんが併せ持つてやるということは、実は単純に見えて希有な例なのです。それができるのは、過去の演劇的な体験や、受けた教育、示唆と関係があるのか、自分の中に本来あったものが開花してきて、変形してきて出てきたものかをお聞きたいということです。

S リアリズムとよく一般にいわれるような役作りだと、こういう

女性像は破綻しますよね。やはり私、どちらかというと、リアリズムは不得手ですね。例えば先ほどみたいにとっても自堕落な身体をしながら綺麗な声を出していくような、分離したようなことはとても好きで、だから自分の中にも少しだけでも鬼になりたいような気分があると、そこから広げて鬼にもなります。だからある時期から破綻を来す役とかはとてつもなく魅力を感じるが、一般的なその辺の奥様とかを魅力的にやるのはちょっと大変というところがあって、趣向がそっちへ行ってしまうです。

N そうというのは自分でうまくいかない。あるいはやりたくないの。

S やってみたいのだけれど、やってみるとちっとも魅力的ではないと自分で分かってしまうわけです。

N 統一していくよりは分裂させていく方が自分ではきっと面白いのですね。そういう物を突き動かすものは何なのですか。その人の資質だといってしまえば簡単なのですが、何がそっちに行かすのだろう。

S 例えば小さい時に習った日本舞踊は、やはり歌舞伎とかそういう物の系列だが、歌舞伎みたいなものは、やはり山姥を演じたり、女郎蜘蛛のようなものが出てきたりとか、七変化していくでしょう。自分の資質としてああいうものにどこか魅力を感じている所があると思います。だから近代劇みたいなものが苦手よね。何か近代劇で向きそうなものを蜷川さん演出してよ。

N 分かった。そういうものもやってみたい気がするんだ。次に白石さんとやる時には、ちょっと新しい白石さん、新しい蜷川幸雄像でいける。これが結論かな。

S わー、やった。(拍手)